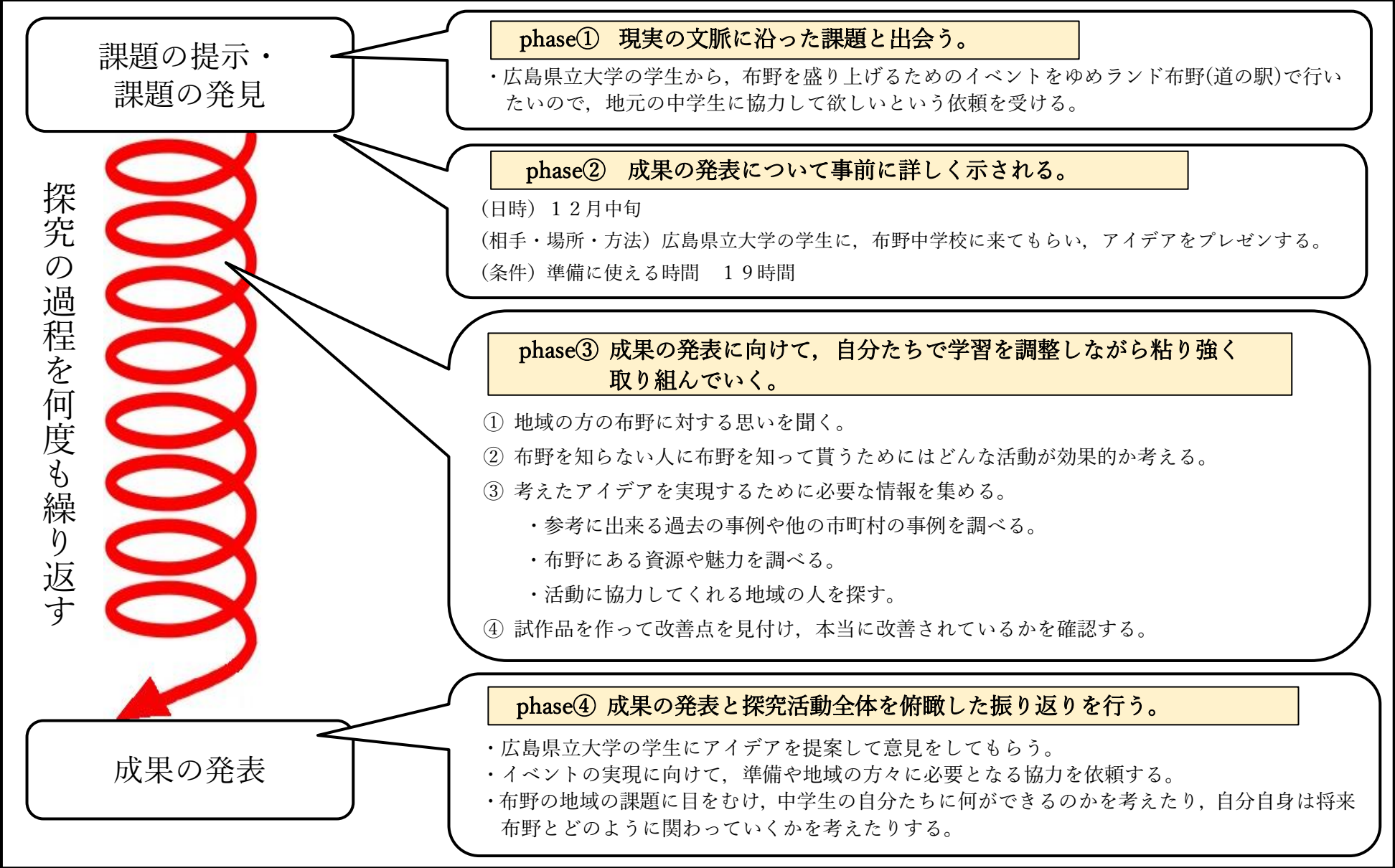


1. 探究のスパイラル



2. 実際の活動の流れ

phase①では、職場体験先である道の駅に調査に来ていた^ア県立広島大学の学生から、布野にある地域資源を使って、布野の地域を盛り上げる活動を中学生とともにしたいと依頼を受けた。

phase②では、その依頼を受け、地域を盛り上げるためにどのようなことができるのかを考えるためクラス内で協議を行った。生徒たちは、地域の特色を調べる必要があると考え、布野町まちづくり連合会に取材に行くことが決まった。

phase③では、^イ布野ふるさと祭りにスタッフとして参加して地域の様子を調べたり、^ウ布野町まちづくり連合会の二本木さんや三次地域森林組合の宮本さんに取材し、布野にある資源やその資源の活用方法について話を聞いたりした。その後、「布野の人たちが元気になってくれることが一番うれしい」という地域の思いを聞き、さらなるアイデアを練った。

phase④では、^エ来年度の活動方針を決定した。三次地域森林組合から聞いた竹の処理に困っているという話と、布野ふるさと祭りで、設置していたおもちゃで遊んでいるときの子供たちの笑顔溢れる様子を関連付け、「竹を使った遊具を開発し、ふるさと祭りで小さい子が遊べるブースを出店する」という目標を決定した。竹を使った遊具には、ストラックアウトや輪投げ台を作ってはどうかというアイデアを出している。

3. 活動の様子

写真ア

大学生からの依頼

触って遊ぶおもちゃがあれば、小さい子は楽しく遊べる。

写真イ

ふるさと祭りにスタッフとして参加

写真ウ

地域に取材

竹が生えすぎて、切った竹の処理に困っている。

竹を使ったおもちゃを作れば、ふるさと祭りに来た小さい子に楽しんでもらえる。

写真エ

来年度の計画を立案

4. 成果と課題

成果として、地域の方(二本木さん、宮本さん)への取材を通して、地域の大人の思いや考えに直接に触れることができたこと。教わった地域資源をもとに、地域を盛り上げる活動について考えることを通して、布野の良さを改めて認識することができたことがあげられる。

課題として、指導者側の見通しが甘かった点があげられる。具体的には、どのタイミングで生徒と地域の方を合わせるのかといった活動の流れや、次の活動に繋げるためには生徒がどんな情報を得てくれればよいのかという質問内容についての吟味が不十分であった。予想される生徒の反応を深く考えて指導計画を立案する必要がある。また、多様な考えを出すために基盤となる学級組織づくりも日常的に取り組んでいく必要がある。